

〈短 信〉

槍を剝く

工藤 力男

わが国の最も古い落語集の一つで、しかも膨大な量の話を収める『醒睡笑』、その角川文庫版を拾い読みすること久しくなります。主に古代日本語について考えることの多い日常から、江戸時代初期の言語・文化・歴史にはまったくといいのですが、学生の演習の材料としてはてごろなので、いつか教室で扱ってみたいと思っております。

そのうち、東京大学南藝文庫蔵本が漸本大系に収められ、静嘉堂文庫蔵本の翻刻が刊行され、平凡社東洋文庫には現代語訳もはりました。鈴木棠三氏の労作『醒睡笑研究ノート』が活字になったうえに、東大南藝文庫蔵本の岩波文庫版も出たので、学生でも手軽に全体が見られ、わたしのようにな出不精にも便利になりました。そこで、初めは内閣文庫蔵本の複製、ついで寛永版の複製を使って、つごう三学期にわたって読む機会がありました。演習の教材としては、略本だが寛永版のほうが、いろいろ問題が出てきておもしろい、というのがわたしの感想です。

さて、教室で学生と読みながら、あれこれといただいた疑問のうちから、特に気になる一つのことについて、短文をつづることにします。それは広本では巻之二「腔」の、略本では巻之一「腔」の、ともに第一話にあります。略本には、広本にある雄長老の歌にちなむ後半の話が無いだけで、本文は大筋では違わないので、ここには岩

淵匡氏の翻刻した静嘉堂文庫蔵本の本文を掲げておきます。斜線は原本の改行箇所を示します。

一 腑のぬけたる仁にゑびを振廻けるか赤を見て是はむまれ付／か又朱にてぬりたる物かと問ふ生得は色か青けれと釜に／て煎て赤ふなるといふを合点し居けりある侍の馬に乗たる先へ二間まなる柄の朱鍔二十本斗持たる中間／共のはしるを見手をうつて扱も世は広し奇特なる事や／と感する何をそなたは感するやと問ひたれば其事よいま／の鍔の柄の色は火をたいてむいた者ちやかあれ程長い／鍋がよふあつた事やと

ことはそのあとから二行め「火をたいてむいた者ちやか」の「むいた」にかかわります。鈴木棠三氏校注の角川文庫と岩波文庫、それに『醒睡笑研究ノート』は、本文を「剝いた」としています。東洋文庫の現代語訳は「皮をむいて色付けした」となっています。つまり、鈴木氏は一貫して、これを「槍を剝く」と理解していることが分かります。しかし、槍を剝くとはどういう行為なのか、わたしには分かりません。現代語訳では、「色付けした」を補っていますが、本文を見るかぎりでは、色付けという行為は考え難いし、さらに言えば、「火をたいて」とのつながりが、かえって悪くなっています。そもそも、槍に加熱して皮を剝くのなら、何も鍋を使うまでもなく、じかに火に当ててそうすることができるとは思いません。この「むいた」に、「剝いた」と漢字を当てていいのでしょうか。

ムイタは四段活用動詞の連用形に助動詞タが付いたものでしょう。すると、ムイは、イ音便形か、ハ行動詞のいわゆる転呼形と考えられます。まずハ行の語尾をもつなら、その基本形はムフ。しかし、そのような動詞は考えられません。一方、イ音便になるのは、

カ・ガ・サ行の動詞です。カ行なら、「向く」と鈴木氏の採る「剝く」がありますが、「向く」では意味が通じないし、ガ行のムグという動詞がありえたとは思えません。残るサ行なら、ムス(蒸・生)で、これならありえますし、文脈から「蒸す」と考えてごく自然な理解が得られるように思います。そこで、この時期にムスのイ音便がありえたかが、次の問題になります。

ムスのようなサ行四段動詞連用形のイ音便化現象が、最盛期に達した時期にあたるキリシタン文献では、これはかなり規則的に生じており、鈴木博氏(1978)によると、天草本『平家物語』では、イ音便にならないのは申スと召スだけだといえます。『日葡辞書』では、申ス是非音便形で掲げられていますが、召スは音便形で出ています。この辞書のいわゆる規範性のゆえでしょうか。蒸スも音便形で挙がっています。

蒸スは、橋本四郎氏(1962)が大蔵流の虎明本・虎寛本、鷲流の狂言本をおおよそ調査して、全く音便例がないとした三類のうちの、(a)の二音節動詞に当たります。狂言本では、キリシタン資料に比べて、衰退し始めている時期の状況を反映しているのでしょうか。奥村三雄氏(1988)の、狂言から近松の世話浄瑠璃にわたる調査では、二音節動詞でサ行イ音便化率が高いのは、アクセントが二類に属するものです。そして蒸スは二類なのです。『醒睡笑』が編まれたころ、京都で蒸スのイ音便が行われていたと考えることは、決して突飛なことではないと思います。ただ、ここで想定される蒸スは、あまり使われることがない語らしく、諸氏の論考には挙がっておらず、わたしも抄物などをボツボツ見ているのですが、まだ実例に出会いません。諸賢のご教示を仰ぎます。

今世紀初頭、文部省国語調査委員会の手で実施された「口語法調査報告書」によると、その調査項目の第十五条に「四段活用ノ動詞ヨリて」「た」ニ続クルトキハ……」があります。その二十一語のうちに蒸スは見えません。京都府下の報告はかなり詳しく、京都市とその周辺ではイ音便の衰退が著しいのですが、丹後地方ではかなりよく保存していたことが分かります。岐阜県からの報告は、県下一般にイ音便を用いるむね回答し、致イテとは言わず、消イテはキヤイテと言ひ、召イテは言わねず、押イテ・乾イテ・貸イテ・足イテ・伏イテは言うとなつています。

岐阜県下には今もこのサ行イ音便は残っており、教室でこの話を讀んだとき、一人の学生が自分の祖母は蒸イテと言うと話しています。二年前まで揖斐郡徳山村に住んでいた大牧富士夫氏は、徳山村では入り渡りのウを伴って、ウムイタのように言うと言っています。三十年前、県下の山県郡富岡村の方言を調べた奥村氏(1962)は、二音節サ行四段動詞のうち、下降調の語だけがイ音便形をとることを、「アクセント核に当たるシは音便化せず、アクセント核の後のシが音便化した」と説明しています。この解釈にわたしも賛成です。

『醒睡笑』内部でのサ行イ音便はどうかという点、当然めずらしくはありません。角川文庫について電覧して、九語十九例が拾えました。二音節動詞では、出ス・ナスが各三例、貸スが一例のほか、致ス・落トスなど三音節語で十二例でした。

本書には、ほかにもえびを素材とする話があります。巻之六「うそつき」の第九話には「いりて後こそ赤けれ」とあり、巻之七「舞」の第七話は槍とえびが関わる点で、いまの話に通う面があつて参考になります。ここでは、「えびを「ゆでる」とも「いる」とも言っ

ております。えびの調理法はいろいろ有っていい訳ですが、近代に採集されたこのたぐいの民話では、動詞を換えることはないようです。

結局ここでは、「煎る」を、あるいは調理法としての区別が付かず「蒸す」に言い換えたために、校注者を惑わせる結果になったのだと思います。けれども、うつけさんを主人公にした話では、文句を言うわけにもいかないし、手がこんでいるだけ、笑話としてできがいいとも言えます。ここは一つ大笑いして水に流すべきでしょう。

文 献

奥村三雄(1958)：「音韻とアクセント―アクセント研究の意義―」

〔『国語国文』27・9〕

同 (1968)：「サ行イ音便の消長」〔『国語国文』37・1〕

鈴木 博(1972)：『周易抄の国語学的研究』

橋本四郎(1962)：「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」〔『国語

国文』31・4〕

——岐阜大学教授——

(昭和六十三年八月十五日 受理)